

弥生時代における墓制の展開とその社会

會下和宏

論文の要旨

本論文は、日本列島各地に展開した弥生墳墓の様々な属性について検討を加え、さらに朝鮮半島や中国大陸における墳墓との比較研究によって、弥生時代墓制の社会的、歴史的な意義について論じたものである。

まず第1章では、これまでの弥生墳墓に関する研究史を回顧し、研究の方向性を展望した。特に1960年代以降、九州北部以外の日本列島諸地域でも弥生墳墓の検出事例が増加し、各地の墓制の個性的様相が明らかになっていった。こうした地域性が現れる背景のひとつとして、中原を中心とした東アジア世界システムの周辺に日本列島弥生社会を位置付け、漢帝国からの物資・人・情報・思想の流入・刺激が、弥生社会に及ぼした影響が考慮されることになった。以上をふまえた研究上の視点として、第1に、弥生墳墓における葬送儀礼が、集団のどのような死生観に基づいて死というものに対応し、死者を表象しようとしたのか、第2に、葬送儀礼が社会の統合や結合強化においてどのような役割を果たしたのか、第3に、中国大陸・朝鮮半島における漢代併行期の墓制が、日本列島の弥生墳墓に与えた影響にはどのようなものが見られるのか、という問題を認識した。

第1章で確認した問題関心のもとに、第2章と第3章では、弥生時代の日本列島各地に展開した墓制について、まず諸属性の時期的変遷や地域的特色を具体的に抽出し、その社会的背景について考察を加えた。第2章第1節では、木棺墓・甕棺墓などの埋葬墓やそれらを区画する区画墓の様相と墓域構成について整理した。弥生中期から後期初頭頃、各地に1辺ないし直径が20mを超える大型区画墓が散見されるようになる。つづく弥生後期前半頃では一時的に大型区画墓が減少するが、弥生後期後葉から終末期頃、再び大型区画墓が増加し、本州日本海側を中心にして40m級のものがみられるようになることを確認した。

第2章第2節では、近畿中部における方形周溝墓群の配置形態について考察した。弥生前期から中期では、周溝を共有しながら接続するものが多いが、弥生終末期になると周溝を共有せず、独立するものが増加する。弥生終末期頃の方形周溝墓は選別化が進み、その被葬者は社会的有力者であったと解釈した。

第2章第3節では、時期・地域的に通覧することができる墓壇規模に焦点をあて、その格差が他の墳墓要素とどのように相関し、どのような意味をもつのかについて検討した。その結果、弥生前期末葉頃から九州北部で、弥生中期中葉頃から近畿北部で、弥生後期頃から山陰や吉備南部で一部の埋葬墓の墓壇規模が大型化することを確認した。また、弥生後期から終末期の中・大型墓壇は木槨・舟底状木棺・鉄刀剣副葬などと親縁性がある点を看取した。

第2章第4節では、区画墓に附随する建物跡・土坑・柱穴・敷石状遺構など、葬送行為との密接な関連を窺わせる遺構について整理した。葬送行為の工程において、こ

うした建物や柱の設営・撤去、土坑掘削といった作業、これに伴う様々な儀礼の諸段階があったことを想定した。

第2章第5節では、未成人埋葬について検討した。概ね3～5歳前後までは土器棺墓、それ以上の幼小児は、区画墓や木棺墓を造営するという一般的傾向がみられた。胎乳幼児は玉類か鏃、弥生後期から終末期の幼小児は、玉類か鉄器が選択的に副葬される場合が多い。また、弥生後期から終末期の近畿北部における幼小児用木棺墓では、同一台状墓に共在する成人埋葬墓の内容によって、副葬玉類の数量に多寡がみられたり、短剣が副葬されたりする事例があり、生来的な血縁系譜によって副葬品格差が表現されている可能性を考えた。

第3章では、副葬行為の様相について検討した。まず第3章第1節では、西日本における弥生墳墓副葬品の地域性と変遷を把握し、その背景を考察した。弥生後期後葉頃の山陰諸地域をみると、比較的大型の墳丘墓における大型墓壙を有する埋葬墓では鉄刀剣・ガラス製管玉などが副葬され、これに準じる規模の墳丘墓ないし無区画の埋葬墓では鉄鏃・鉄製工具・碧玉製管玉などが副葬されるか副葬品をもたない傾向があることを看取した。墳丘規模・墓壙規模・副葬品内容が一定の相関関係を示す様相を読み取り、ある地域内における縦の階層関係と地域相互における横の連帯・共属関係が形成されていたことを想定した。

第3章第2節では、東日本における弥生墳墓副葬品の地域性と変遷を把握した。弥生後期に副葬される鉄剣・鉄銅釧・鉄石英製管玉・翡翠製勾玉などの製品・素材は、北陸から中部高地を経て関東南部・遠江東部へといたる一ルートを想定した。そして東日本では、諸地域における小階層化した社会の上位者が個別分散的にこうした稀少品流通に関わり、副葬品として消費しうる社会であったことを推測した。

第3章第3節では、玉類副葬の器種・素材組成や数量などの地域性と変遷を把握した。日本列島の弥生時代玉類副葬は、朝鮮半島からの影響を受けつつも、独自性をもって展開したことが確認できた。

第3章第4節では、鉄器副葬の地域的様相を整理し、鉄刀と鉄剣の偏在的分布、埋納青銅器と副葬鉄製近接武器の排他的ないし偏在的分布を看取した。

第3章第5節では、弥生墳墓および無文土器時代末期から原三国時代の朝鮮半島南部における鉄刀剣副葬の様相を検討した。日本列島の鉄剣のうち、弥生後期中葉頃から終末期の長茎細茎の長剣などは舶載品、短剣は日本列島製が多く含まれる可能性があるとして想定した。また鉄刀剣は、特に上位階層を中心にした成人男性被葬者の副葬品であることを確認した。

第4章では、弥生墳墓の特徴について考えるために、東アジア諸地域の墳墓の様相について概観した。まず第4章第1節において、弥生時代と同様に、初期国家成立前後と目される中国大陸中原の二里頭文化期と二里岡文化期の墓をみた。上位階層墓において銅戈などの近接武器が副葬される点は、弥生墳墓と共通性する一方、飲酒儀礼

用の青銅製容器や玉礼器の副葬は、王権中枢の儀礼を投影した、中原の特徴を示すものであった。

第4章第2節では、弥生中期の墳墓とも年代が重なる前漢における皇帝陵と竪穴墓壙を有する諸侯王墓を比較検討した。墳丘規模については、前漢皇帝陵と諸侯王墓の間で明らかな格差が改めて確認できた。また、諸侯王墓の墓道は、墓壙の1辺ないし2辺のみにあるが、前漢四代皇帝・景帝の陽陵の墓道は四周にのびる、いわゆる「亜」字形をなす。『漢旧儀』の記載にあるように、これが前漢皇帝陵の一般的形態とすれば、墓道の数も厳格に規制されていたことが窺える。以上のように前漢期の中国大陸においては、被葬者の身分秩序が墳丘規模などの量的格差、墓道形態の規制などに投影されるという状況を改めて確認した。

つづく第4章第3・4節において、漢代における王墓などの副葬品配置を概観し、鉄剣・玉璧・鏡の「重ね置き副葬」について検討した。その結果、日本列島の弥生中期後半や古墳前期において複数面の鏡を重ね置いて副葬する発想が、中国大陸に求められる可能性を考えた。

最後に第4章第5節において、日本列島における弥生墳墓を東アジア規模の視点から比較検討した。まず、弥生後期の日本列島を、鉄刀剣副葬と大型区画・大型墓壙造営を重視する山陰・北陸・吉備南部・近畿北部地域、鉄刀剣副葬と武器形青銅器埋納の双方に力を注ぐ一方で大型区画・大型墓壙造営行為が稀薄な九州北部・対馬地域、鉄刀剣副葬がなされる一方で青銅器埋納、大型区画・大型墓壙造営が稀薄な中部高地・関東南部地域、青銅器埋納に力を注ぐ一方で鉄刀剣副葬、大型区画・大型墓壙造営が稀薄な近畿中部・東海地域に分類した。そして、漢帝国や周辺諸地域の様相を概観したうえで、弥生後期における墳墓副葬品内容をみると、鉄刀・長剣が分布するのは、九州北部・吉備南部・日本海側諸地域に多いことから、こうした文物の副葬習俗の淵源が、大きくみると漢帝国に求められると考えた。

終章では、第1節においてこれまでに検討した弥生墳墓の変遷と特色を整理し、第2節において、第1章で認識した第1の視点である死への対応手段としての弥生墳墓儀礼、あるいは第2の視点である集団統合強化のための弥生墳墓儀礼という関心から、墳墓の構造、副葬行為、墳丘やそこでの葬送行為について改めて解釈を行った。第3節では、第3の視点である弥生墳墓にみられる日本列島外からの影響について検討した。弥生墳墓における鏡多量副葬や鉄刀剣副葬は、遺体を腐敗から護る辟邪を意識したものであったことが窺われ、大きくは中国大陸にその淵源が求められると想定した。また、「上墓」の風習といった墳墓祭祀を重視する漢の影響に触発されて、本州西部において墳丘墓が発達した可能性についても言及した。